

令和元年度産業建設常任委員会行政視察報告書

1 視察日時 令和元年10月15日（火）～10月17日（木）

北海道苫小牧市	10月15日（火）午後3時00分～午後4時30分
西いぶり広域連合	10月16日（水）午前10時00分～午前11時30分
千歳市	10月17日（木）午前10時00分～午前11時00分

2 視察項目及び目的

【苫小牧市】「まちなか再生総合プロジェクト」について

苫小牧市独自の計画「まちなか再生総合プロジェクト」の独自性、様々な取組、地域とどのような関係を作り上げて、実践しているのかを視察研修することにより、本市の施策の参考とする。

【西いぶり広域連合】「ごみ処理施設「メルトタワー21」」について

西いぶり広域連合のごみ処理施設「メルトタワー21」は、全国に先駆け、設計・施工から施設運営までを一括に発注するDBO事業により発注された施設を視察研修することにより、本市の施設の設計・施行・施設運営についての参考とする。

【千歳市】「防災学習交流施設「そなえーる」」について

千歳市の「防災学習交流施設「そなえーる」」は、防災についての理解を深めるためだけでなく、防災対策の拠点としても機能する施設で、当施設を視察研修することにより、本市の防災意識の向上の参考とする。

3 参加者 産業常任委員会（8名）

委員長	田中 良夫
副委員長	中条 恵子
委員	栗原 肇
委員	小坂 徳蔵
委員	松本 英子
委員	関口 孝夫
委員	鎌田 勝義
委員	金子 正則

随員 議会事務局議事課主事 福島 征也

4 行政視察内容

【苫小牧市】まちなか再生総合プロジェクトについて

①市の概要 市の木：ナナカマド 市の花：ハスカップ

人口：171,251人/8月1日現在 面積：561.57km²

市街地は東西に広がっている。千歳市との境には溶岩円頂丘（ドーム）を持った三重式火山の樽前山（活火山）があり、市東部には日本初のバードサンクチュアリに指定され、国の鳥獣保護区やラムサール条約登録湿地にも指定されているウトナイ湖があるなど、近郊には希少な自然が残されている。樽前山を含む周辺一帯は支笏洞爺国立公園の区域となっている。

②視察先対応者及び説明者

苫小牧市議会事務局 副主幹 能代 恵子氏

主査 尾野 智昭氏

書記 渡辺 陽氏

③視察報告

◎まちなか再生総合プロジェクトの概要について

このプロジェクトは、人口の拡散、商業環境の変化、消費者ニーズの多様化、商業者の高齢化等の社会環境の変化に伴い、苫小牧市総合計画（第6次基本計画改定版）のまちづくりの目標「安全・安心で快適に暮らすまち」を実現するための個別計画の1つとして、平成23年に「まちなか再生総合プロジェクト（CAP パート1）」を策定した。3年毎に見直しを行い、現在は「まちなか再生総合プロジェクト（CAP パート3）」となっている。

地域住民や各種団体、将来のまちづくりの担い手である子どもたちとともに、まちへの愛着と誇り、未来への責任感を育む場を創る。また、既存の拠点施設や商店街との連携・ネットワークによる人の流れを生み出すことで、日常的な賑わいの創出の推進を目指すプロジェクトである。

◎今後の課題について

旧サンプラザビル跡地の利活用や駅前の再生という大きな課題を少しでも払拭し、人の集まる明るいまちなかとするため、引き続き事業を継続していきたい。

また、近年はこれまでの取組を通して、市民・団体・企業など民間主体によるまちづくりの機運も高まり、まちづくりに携わる人が増えつつある。今後も民間による自主的な取組を支援し、日常的なにぎわいの創出を目指していきたい。

◎主な質疑

質 問	説明及び回答
このプロジェクトを立ち上げた背景は	中心市街地から大型店等が撤退し、商業・娯楽等生活の中心が中心市街地から郊外へ移動したため、中心街の空洞化が目立つようになった。 そのため、今後のまちづくりの方向性として、「様々な都市機能がコンパクトに集約した、歩いて暮らせるまちづくり」を進める必要があると考え、「まちなか再生総合プロジェクト(CAP)」を策定した。

具体的に取り組んでいる事業は	COCOTOMA(ココトマ)と呼ばれるまちなか交流センターを既存のビルへ設置して、指定管理者が主体となり、市内の高校や近隣の商業施設と連携して様々なイベントを開催しているほか、商店の店主等が講師となり、プロの専門的な知識や情報、コツを無料で受講者に伝える少人数制ゼミの開催、まちなかにおいて産学連携に取り組む学校等を支援するなど、地域の連携を重視した事業を数多く展開している。
市の役割は	広報・PR・イベントの開催等の支援や、補助金の交付、まちづくりの機運の醸成や人材の育成・発掘等を行う。
今後の取組は	現在の「まちなか再生総合プロジェクト(CAP)」パート3を検証し、課題を洗い出してパート4の策定を行う。

◎所感

苫小牧市の「まちなか再生総合プロジェクト(CAP)」では、既存の施設をうまく活用し、まちなか交流センター(COCOTOMA)を中心に、交流の場の提供や、子育て世代向けのセミナー、地元の高校と連携してハロウィンイベントを開催するなど、様々な事業に取り組んでいる。これらの事業は、まちなか交流センターの指定管理者が各種団体と連携して企画・開催し、市はそれを支援する形をとっている。仮に市が企画・開催まで行くと、地域の自主性が失われ、市の財政状況によっては継続が困難になる可能性も考えられるのではないかな。

加須市としても、既存の施設の活用や各世代の市民と連携した事業はとても参考になり、これからのまちづくりに生かせるのではないかな。

【西いぶり広域連合】「ごみ処理施設メルトタワー 21」について

①西いぶり広域連合の概要

西いぶり広域連合は、2000年に設立された、室蘭市、登別市、伊達市、豊浦町、壮瞥町、洞爺湖町から構成される広域連合である。

ごみ処理施設「メルトタワー21」や都市公園等の設置・管理・運営の事務を行っている。

②視察先対応者及び説明者

総務課長 田所氏
主幹 稲場氏、藤谷氏

③視察報告

◎ごみ処理施設「メルトタワー 21」の概要について

ごみ処理施設「メルトタワー21」は、全国に先駆け、設計・施工から施設運営までを一括に発注する DBO 事業により発注され、平成 15 年 4 月から本格稼働を開始し、西いぶり広域連合圏内から発生する可燃ごみや、不燃ごみ・粗大ごみの適正処理を行うとともに、熱利用を行うことで循環型社会の形成と地球温暖化防止に貢献している。発生した余熱に関しては、発電や場内の冷暖房に利用するほか、余熱利用施設においても利用している。

施設内に空き缶、ガラスびん、ペットボトルを選別・圧縮などの中間処理を行う工場エリアを見学できる場と、ごみの減量や資源の有効利用についての情報提供と体験の場として、リサイクルプラザを開放している。リサイクル講座やワークショップ等を開催しており、市民にリサイクルに関する知識や情報を提供し、交流の場としても活用している。

さらに、余熱利用施設として、敷地内に「げんき館ペトル」があり、この施設は、体育館や温水プールのあるスポーツ施設で、メルトタワー（焼却施設）で発生する蒸気を活用して暖房やプールの水温を維持している。

◎今後の課題について

施設運営の契約満了が令和3年7月末までとなっており、令和3年8月以降の対応について検討を始める必要性が生じている。さらに、老朽化も進んでおり、維持管理の方法等も検討していかなければならない喫緊の課題となっている。

◎主な質疑

質 問	説明及び回答
公設民営方式(DBO 方式)のメリットは	建設当時の国庫補助金、交付税措置の適用や、起債による低金利な資金の運用ができること。 民間の創意工夫により、事業の効率化と建設コストの削減が図られるため、この方式を採用した。
ごみ処理施設の稼働率の推移は	供用開始時の平成15年は115%であったが、直近10年では90%台を推移している。
げんき館ペトル内の体育館やプールの利用状況は	市民の利用の他、近隣小学校の体育の授業等で使用している。

◎所感

西いぶり広域連合ごみ処理施設では、施設内の見学だけでなく、ワークショップやリサイクル講座を開催して、施設を有効的に活用している。さらに、ごみ処理の廃熱を利用し、施設内の冷暖房や余熱利用施設の体育館の冷暖房や温水プールに利用し、近隣の学校の授業で活用するなど、循環型社会への貢献や地域連携が図られた施設であった。しかし、本稼働から年数が経過し、老朽化や資材費の高騰などの課題があり、これは加須市でも課題となっている点である。DBO 事業や余熱利用等は、加須市でも参考になるのではないかな。

【千歳市】「防災学習交流施設「そなえる」」について

①市の概要 市の木：シラカバ 市の花：ツツジ

人口：97,564人/8月1日現在 面積：564.50km²

「北海道の空の玄関口」である新千歳空港があり、国内線の東京（羽田）-札幌（新千歳）間は単一路線としては世界一の乗降客数を有している。

市内には空港があるほか、高速道路（道央自動車道・道東自動車道）や港（苫小牧港）にも至近距離であることから工業団地が集積している。

平成22年国勢調査によれば千歳市の平均年齢は41.3歳で、北海道一若いまちとなっている。

②視察先対応者及び説明者

主任管理員 日永 一徳氏

③視察報告

◎千歳市防災学習交流施設「そなえる」概要

千歳市防災学習交流センター『そなえる』は、市民（自主防災組織）、ボランティア、防災関係機関が単独または相互に連携し、防災学習や防災訓練等を実施することで、市民や防災関係機関の防災力を高めるとともに、防災関係機関に対する理解を深めることを目的とする施設である。

施設内には、阪神・淡路大震災や東日本大震災、熊本地震などの過去の大地震を体験することができる地震体験コーナーや、煙避難体験コーナー、予防実験コーナー、避難器具体験コーナー等があり、様々な体験ができる。

さらに、展示コーナーでは、自助・共助に重点を置いており、実際の避難の際の問題点や注意点を写真や図を使い分かりやすく展示している。

◎主な質疑

質 問	説明及び回答
体験や展示のほかに、部屋等の貸出も行っているのか。	会議室や学習室の貸出のほか、屋内の訓練室を各種コミュニティ活動の場として貸し出しをしている。
この施設は、災害時には避難所として使用するのか。	災害時には災害対策の拠点として使用する。

◎所感

千歳市防災学習交流センター「そなえる」では、実際に起こった災害時の写真の展示や災害時における自助・共助がいかに大切かを伝えるための展示、災害グッズやその代用品を家庭で作る方法等を展示していた。

さらに、地震体験や避難器具体験等の実践的な体験ができる施設であり、避難訓練も実施しており、災害時には活動拠点として稼働するとのことだった。加須市でも台風などの災害時に、行政だけでは限界があり、自助・共助が大切だということを伝えるための方法として、参考になるのではないかと。